

■ ■ 種々なこと（11話） ■ ■ ===⇒三州横山話より

■ 空を通過して行ったもの ■

明治一八年頃のある秋の日、私の父が字相知の入というところの田で仕事をしていると、どことも知れず劇しい唸り声がして、東の空から西の方へ向けて、中空を赤く燃え盛った火の塊が、物凄い響きを立てて通り過ぎたと言いました。暮れ近い時刻であったそうですが、あれが火のタマというものだろうと言いました。

また某という女が夜門口へ出ると、飯茶碗ほどの大きさの火の塊が、山の頂とすれすれに、北から南の方へ飛んで行ったそうですが、それが通る間は、山の草の色が、青く明瞭と見られたと言いました。

■ ヒトダマ ■

人魂は、人が死ぬ三日の間にその家の棟から出ると言いますが、火の玉のように勢いはなく、青い火が、ふらふらと燃えて中空を行くと言います。

ある人が見た人魂は、どこからともなく青い火の塊が飛んで来て、この男の頭上を、三回ほど回ったと言いました。

また、鳳来寺村の字椎平の某という男が、夜、人魂らしい、青い火の落下した場所を見定めておいて、翌朝早くそこへ行って見ると、一握りほどの泡のようなものがあつたと言います。

■ 魔が通る ■

私が子供の頃、それは秋の頃と思いますが、その日の午後、西の方の空へ向けて魔が通ったと言って噂していました。何ものとも知れぬものが、空を空車を挽いて走って行くような音をさせて過ぎたと言いました。この日は、薄曇した静かな日でした。

■ 風に乗った魔 ■

早川文六という男が、暴風雨のおり、縁側に立って見ていると、空を大きな材木のようなものが飛んで来て、家の上を通ったと思うと、屋根の瓦が、がらがらと崩れ落ちたそうです。家内の女と二人、はつきり見たと言いました。

暴風のおりは、風に乗って魔が通ると言います。それがぶつかると、立木が折れ

たり、家が倒されたりするのだと言います。

■ 引越しを知っていた鼠 ■

村の早川ダイという女の話でしたが、この女の里の北設楽郡段嶺村の〔現、設楽町〕で、某という男が、秋田圃に稲叢を作っていて、ふと傍らを見ると自分の家から幾疋となく鼠が出てきて、それがみんな、そばの小川を飛び越して、丘の上の日当たりのよい家へ向かって駆けて行ったそうです。その男の家は、丘の下の日当たりの悪い所にあつて、暮しも豊かではなかったのです。その男は内心つくづく考えて、鼠までが愛想尽くしをして丘の上の家へ越して行くのかと思って見ていたそうです。

それから二、三日経つと、丘の上の一家が、急に土地が嫌になつて、屋敷を売り払つて遠くへ越してゆくと言うので、周旋する男があつて、その男に、是非屋敷を買い取れと、むりやりに薦められて、とうとうこの屋敷を買うことになつて間もなく引越したと言いましたが、それからは家運もおいおい栄えて来たそうです。

■ 座敷小僧 ■

北設楽郡本郷村の、キンシという酒醸造家は四、五〇年前までは非常に栄えた旧家だったそうですが、この家の奥座敷には、座敷小僧が住んでいると言つて、雇い人などが、夕方雨戸を閉めに行くときなど、時々姿を見かけたと言いました。一〇歳ぐらいの子供だったということは聞きましたが、確かなことは聞きません。この家は今は没落してないそうです。

■ 屋根裏で聞こえた三味線 ■

明治二四年頃の秋のこと、私の家で、村の女を大勢雇つて、遠くの山へ草刈に行くとして、朝まだ暗いうち、仕度をして、皆のものが門を出ようとするとき、屋根裏で三味線の音がしきりにしたと言います。まだ家の中にいたものも、門の外に立っていたものも明らかに聞いたと言いました。家に三味線もなく、屋根裏に人間が住んでいるわけもないので、皆不安に思いにかられたと言いましたが、祖母が、今日は親戚の娘の命日に当たるからその娘の思いが来て弾いたのだらうという解決を与えて、すんだと言いました。

その娘は、生まれながらの盲目であつたため、村のものが、蚯蚓の生まれ変わり

だなどと言っていたと言いますが、三味線を習っていて、一八の年になくなったのだそうです。

■ 仏壇に残る子供の足跡 ■

盆の十四日の夜は、精霊が還ってくるもの故、仏壇の前に、膳に白砂を盛って供えて置くと、可愛らしい子供の足跡があると言います。

■ 柿をならせる手段 ■

柿の木に実のならない時は、正月一六日の朝、小豆粥を煮て、木元へ行って、一人が鉈を振り上げて、この柿の木はちっとも実がならないから、伐ってしまおうと言って、根元を鉈で切ると、一人がそれを制して、この柿の木はきっと立派に実がなるから今度だけは助けてくれと侘び、それから柿の木に向かっては、私が今度だけは詫びてやったから、どうかたくさんなってくれと言って、持っている小豆粥を切口に与えると、翌年から必ずなると言います。

■ 花ばかり咲いて実のならぬ梅 ■

ある婆さんが、その屋敷にある梅の木に花ばかり咲いて実がならないのに腹をたてて、根元へ萱を積んで、どんどん火を燃して木を苦しめて、思い知れと言ったところが、相変わらず花ばかり咲いて、実は少しもならないので、このたびは婆さんが後悔して、毎朝その梅の根元へ行ってさんざん詫言を言うと、翌年からたくさん実がなるようになったと言いました

梅や柿に限らず、密柑などもたくさんなった時は、家内中のものがこの傍へ行って、見事見事と誉め言葉をかけてやると、ますますなると言いますが、これに反して、せっかくなったものを、まずいと言ったり、玩具にしたりすると、木が悲しがつて、ならなくなると言います。

■ 種々な呪いの歌 ■

血止めの歌 手近にある木の葉をとって、噛んで傷口に押さえつけて、

「血ノ道ヤ血ノ道ヤ父ト母トノメグリアイ、血ノ道トマレ血ノ道ノ神」

と三度唱える。

鼬が行く手を横切った時は、三步後に戻って、

「イタチ道チ道チカ道チガイ道、ワガユク先はアララギの里」
と三度唱えて行く。

山犬に遇った時は、

「神国二人ヲ恐レヌ畜類ハワガ日ノ本ニ居ヌハズノモノ」
と三度唱える。

盗賊の用心に唱える歌は、就寝前に、

「ネルゾ寝タタノムゾタル木夢ノ間ニ、何事アラバ起セ桁梁」
と三度唱える。

火の用心の歌、

「霜柱氷ノ梁ニ雪ノ桁、雨ノタル木ニ露ノ葦草」
と三度唱えて寝る。

わがもとを通り過ぎて行く人を立ち寄らせる歌と言って、

「アマツ風雲ノ通イ路フキトジヨ 乙女の姿シバシトドメン」

この種の歌はまだたくさんあることと思いますが、記憶にあるのはこれだけです。

蜂にさされぬ用心には、

「シショゴショムニシンシンシン」 と唱える。

狐に化かされぬ用心には、

「狐ヲ喰ッタラウマカッタ マンダ（未ダ）奥歯ニハサガッテ居ル」

と言えば狐が恐れて逃げるといふ。

蛇に喰いつかれぬ用心には、

「蛇モママシモ喰イツクナ 知立猿投ノ大明神」

と三度唱えるといふ。